

■活動報告書

座談会：地域情報研究所と若手研究者

江成 穰*、堀池 航洋**

I. 自己紹介

【江成】松山大学経済学部特任講師の江成穰です。現在は客員研究員として地域情報研究所の活動に携わっております。専門は地域経済学と財政学で、財政をはじめとした公的資金が地域の経済に与える影響などをテーマに研究しています。2018年4月に立命館大学政策科学研究科博士後期課程入学、2021年3月修了、同年4月より松山大学経済学部の現職に着任しました。2024年4月から広島経済大学の経済学部のテニユアポストに移る予定となっております。本日はよろしくお願いいたします。



(左：江成、右：堀池)

【堀池】OIC 総合研究機構プロジェクト研究員の堀池です。現在は日本学術振興会特別研究員 PD（資格変更）のかたわら、地域情報研究所にも所属させていただいております。専門は行政学です。2024年の4月からは札幌学院大学法学部に専任講師として着任の予定です。よろしくお願いいたします。

II. 所属のきっかけ

【江成】じゃあ地域情報研究所に入ったきっかけや理由のあたりから話をして行きたいと思うんですけど、僕は大学院博士後期課程の夏ごろに地域情報研究所に加入させてもらった記憶があります。

ちょうど2021年6月に大阪北部地震があって、地震で大学もぐちゃぐちゃになりました。ドクターに進学したばかりで自分自身でもなかなか研究のペースを掴めず、なおかつ先生方からの研究に対する要求水準が非常に高くなる中で、自分が何をどうやって研究していけばいいんだろうっていうことに結構悩んでいる時期でもありました。そんな中で震災もあり、このまま一人で研究を続けていては心身のバランスを崩しかねないという危機感を持っていました。そこでバランスを取っていくには、自身の研究についての悩みや葛藤を内に留めるのではなく、むしろ様々な方と議論をさせていただくことで研究発展のチャン

* 松山大学経済学部講師・OIC 総合研究機構客員研究員

** OIC 総合研究機構プロジェクト研究員

スを探す方が良いのではないかと考えるようになりました。

そういったタイミングで、大学院の指導教員していただいていた森裕之先生にお願いをして、地域情報研究所の所属とさせていただきました。期待した通り研究所では、院生だけでなく研究所やOIC総合研究機構に所属をする研究員の皆さん、そして各機関の所長クラスの先生方と日常的にフランクな議論ができる環境というものを得ることができました。院生用の個人研究室は個々人の作業スペースとしては有用なのですが、そういった議論をしやすい環境ではありませんでした。

大学院の3年間は基本的に地域情報研究所を拠点に研究活動を展開していき、修了後、松山大学に所属をすることになってからも、客員研究員として所属をさせてもらっています。所属するだけでなく、定期的に研究所に顔を出して森先生や堀池さんを筆頭にさまざまな人と議論をさせてもらっています。地域情報研究所に入ったきっかけや理由当時の意図ってというのは、そういったところになります。

【堀池】 やっぱ社会科学系の院生とか、まあ、特に政策科学はその色が強いですけども、徒弟的な研究室を持たないってところと、院生同士の研究分野が全く異なるっていうのは、院生が研究を進める上で、やっぱり結構厳しいところがありますよね。

僕も、地情研に所属させていただいたのは後期課程に進んでからですね。後期課程1回生の4月なので、正確にはそれ以前からお話をいただいていたんですが、そのきっかけは江成さんです。江成さんと僕は同じ研究科出身ですが、学年で言うと二年離れていて実は前期課程では被らない院生同士なんですけども、僕は大学院の早期履修をしたので、運良く同時期に院生だったところから親しくしていただいていたいました。江成さんから、「ドクターに進むのであれば、地情研というものがあるよ」と教えていただいて、森所長にご紹介いただいたのがきっかけになるかと思います。

江成さんが先ほどおっしゃった通り、修士から博士に上がるという段階で、より高い研究の質が求められる。それに上手く適応できない院生がいる中で、ありがたいことに地域情報研究所の研究室に机を頂き、活発な議論をさせていただくことを通じて、それにうまく適応できたのではないかと考えています。

【江成】 堀池さんについては後期課程進学時に、僕の方から堀池さんと研究所の先生方の双方に地域情報研究所の所属にした方がいいんじゃないかという提案をさせてもらって、入ってもらったような形になります。その時の僕の狙いは、常駐可能な研究員を増やしたいという所にありました。

当時の地域情報研究所は、基本的に僕と森先生とあと何名か研究員の方が出入りするというような形でした。ただ森先生も当然お忙しく、そして他の研究員の皆さんもなかなかお忙しい中で、個人としては議論の相手が欲しいなと考えていました。また研究所としても、僕の修了後に常駐するメンバーを確保しておいた方がいいと考えていました。きちんと研究内容に沿った形で、メンバーを増やしていくことができれば、自分自身にも研究所にもプラスが大きいかなと考え、堀池さんに声をかけさせてもらいました。

【堀池】 江成さんが僕を誘っていただいたきっかけはどうであれ、僕にとっては江成さん

と同時期に院生として所属していたのは一年間だけだったわけですが、特にその期間は後の研究活動ベースになったと思います。

Ⅲ. 研究に与えた影響

【江成】研究活動のベースっていてもいろいろあると思うんですけど、具体的に何かありますか？地域情報研究所に所属をしたという事が、堀池さんの研究にどのような影響を与えたのでしょうか？

【堀池】僕は歴史研究を中心に行っています。古くから法制史の分野で扱われてきた戸籍制度という対象に関して、新たな研究の価値と言いますか、研究の意義を創出していくことが、院生の時の最も大きな課題だったわけです。戸籍という制度を、政府と国民をつなぐものとして行政全体から捉える視点、例えば、地域社会に対する影響であるとか、政府の財政的な面から見てどういうふうな意義があるのかとか。地情研への所属はそういった新たな観点から対象を考えるきっかけになりましたし、それによって研究が厚みを増したんじゃないかと思います。

【江成】なるほど。地域情報研究所にいろんな先生方や研究員の方が出入りしている中で、さまざまな議論を通じて、ある種の学際性、学際的な視点っていうのが身についたところが大きかったんですかね？

【堀池】そうですね。それが特別研究員の採用にあたって、大きなポイントになったのではないかと思っています。

Ⅳ. 研究環境

【堀池】地情研はソフト面の研究環境としてもかなり優れているように思います。

【江成】僕が松山大学に職を得た後も地域情報研究所で客員研究員として定期的はこちらに来ている直接的な理由が、まさに研究環境っていう話に繋がってきます。自分が地方大学に着任して第一に感じた点が、研究者が少ないということでした。愛媛県の場合、主要な四年制大学と言うと、僕の所属する松山大学と隣にある愛媛大学に限られていて、その中には関連分野の研究者の方はいらっしゃるんですけど、コロナ禍という事情もあって、日常的な研究交流や研究会、シンポジウムなどは限定的でした。

なので大学に着任して研究をして行く中で、自分の研究についての議論の相手を確認することにとっても苦労をしました。研究される方は皆さん身にしみて感じる部分があると思うのですが、自分ひとりの頭でじっと考えていても、良いアイデアが出てくることは少なく、他の人とフランクにコーヒーでも飲みながら喋っている中でいいアイデアが出てくるのが非常に多いと思うんですよね。

そういう環境っていうのが、院生の数も研究者の数も少ない地方の大学だとどうしても

限られてしまいます。自分の研究の話がきちんとできて、それに対して適切なリプライなり議論なりっていうのができる人の数っていうのが限られてしまうという点が大変だったことで、この点を補完するために地域情報研究所に来ています。

【堀池】やっぱり個人研究室だと両隣に研究室があっても交流は少ないですよ。それに、院生以外で研究室を共有するっていうのは、ありそうであまりない。理系の研究室であれば、教授の先生と若手教員とその研究室の院生さんが同じスペースで共同で実験したりっていうことが多いと聞いてるんですけど。

【江成】僕らがやってる経済学であるとか、行政学であるとかっていう社会科学系の分野は、基本的に教員は自分の個人研究室に引きこもっているような状態になってしまいますよね。仮に自分が研究室から出て誰かと喋りたいと思ったとしても、他の人がそのタイミングで出てきてくれないと喋ることもなかなかできない。

でも研究室を共有していれば、「このあいだの地震の被害ってどうなんですかね?」「大変ですよ」みたいな話から、じゃあ地震の復興に対してどういう政策が展開されて、それって財政的にはどんな議論があって、みたいな話をいろんな人とできる。自分では全然わからないような分野の知見なども教えてもらいながら考えを深めることができるような環境は、院生の頃感じていた数倍は貴重なものだと実感しています。

【堀池】あと、地情研はオープンな感じとクローズな感じのバランスがいい気がしていて。院生には共同研究室っていうのがありますけど、共同研究室はむしろオープン過ぎであまり研究に集中できない側面があったりするんですけど。そこらへんがちょうどいいバランスのような気がします。

【江成】たしかに政策科学研究科の修士の共同研究室はオープンすぎて少し研究しにくい感じがしますし、一方で博士の共同研究室はどちらかというとクローズすぎる部分がありますよね。たしかに地域情報研究所っていうのは結構バランスがいいなというのは感じますね。

【堀池】それと、僕が個人的に良かったなと思うのは、図書館が近いこと。大量の文献を頻繁に借りるので、図書館が近いと文献の取り寄せもしやすいですし、そういうふうな研究資源へのアクセス面も良いところかなと思います。

【江成】図書館に関しては院生の時ももちろんメリットを感じていましたが、客員研究員になってからはよりメリットを感じるようになりました。端的に言えば、立命館大学の図書館を教職員扱いで利用できることのメリットです。客員研究員は兼務教員という立場で図書館のIDカードを発行してもらえて、図書を借りることもできます。自分の大学よりも充実した図書館にアクセスしやすいっていうのは、非常に大きなメリットあると思うふうに感じています。

ていました。当然、歴史研究によって本質的な問いを探求することは重要ですが、
「現実の行政にどう接近していくか」という姿勢も、行政学者として当然必要なわけですよ
ね。おそらく地情研に所属してなかったら、そういった方面の研究活動はしてこなかった
だろうなというふうに思います。例えば、6月には森所長と長野に調査に行き、研究の成果
は学会で報告していますが、その研究内容は今までの自分の研究内容からすると、全く新
しいチャレンジングな内容だったので、その意味では行政学者となるための重要なステッ
プになったんじゃないかなというふうに思います。

僕も江成さんと同じく次年度から新しい大学へ移るわけですが、地方の私立大学では、
これからますます経営環境が厳しくなっていく中で、地域社会との繋がりが非常に重視さ
れていますよね。地情研の理念とつながるかもしれないですけど、現在の研究者にはそう
いった地域に根付いた研究活動どう進めていくか、地域社会にその研究の成果をどう還元
していくか、というような姿勢がますます求められていると思いますし、その姿勢が培わ
れたのではないかと思います。

【江成】分野によってはね、ある種、外部との接触をたっても研究できるような分野って
のものもあるよね。

【堀池】そうですね。これまでの研究では現実の社会や研究対象になかなか接近しづら
いところがあったんですけど、その経験が自分のキャリア形成にも役立ったと感じています。

VI. これからの地域情報研究所

【堀池】最後に、身の程をわきまえず、これからの地情研の話をできたらなというふう
に思うんですけども、立命館大学内に限らず、地情研のプレゼンスを高めるためにはどう
したらいいかみたいな話ができたらいいなと。

まず思っているのは、先ほどの江成さんのお話しにもありましたが、研究プロジェクト
間の日常的な交流が増えるといいなと感じていて、日常的な交流のなかで研究成果を交換
しあうような、そんな感じのことができたらいいのかなというふうに思うんですけど。

【江成】そういう意味では所属の如何に関わらず、もっと積極的に progress report の様な
報告会を開催することは重要なのかなと思っています。やはりプロジェクト間でそれぞれの
プロジェクトメンバーがどういう研究をしてるのか、それが研究プロジェクト全体に対
してどういう風に貢献してるのか、結果として各研究プロジェクトがどんなことをやっ
てるのかということについての相互理解を深めていく必要があると思います。僕や堀池さ
んのような若手研究者、あるいは外部の所属になる人も含めて、積極的に地情研をベース
にした研究報告会が開催され、交流が増えていくことは望ましいのかなというふうに思
いますね。

【堀池】そうですね。これまでの報告会でも、例えば心理学とか、全く異なる分野の研究
成果に触れたのは、非常にいい刺激になりました。あともう一つ、ちょっと研究所の理念

とは異なるかもしれないんですけど、院生の育成についてはどのように考えますか。

【江成】それはすごく重要な点だと思っています。研究所として積極的にさまざまな活動展開をしていくことを考えたときに、研究所に常駐して活動のコアメンバーになってくれる院生や若手研究者を育成するのは、研究所にとっても有意義だと考えています。やはり立命館を中心に若手の研究者、博士後期課程の大学院生や専門研究員の方などに、研究所で研究活動を展開してもらえると、既存のメンバーとの研究交流から新たな刺激を得られます。そんな体制が取られるとより良いかなと思っています。

【堀池】そうですね。地情研の主催で院生にコンペティションのような、研究報告の場を提供するのはどうなのでしょう。地情研に所属するきっかけって紹介じゃないですか、基本的には。そうではなくて、研究プロジェクトに参画して、そこで力を発揮してくれそうな院生を捕まえにいくようなアプローチするのはどうかと。というのも、研究所の位置づけもありますが院生の認知度はあまり高くないように感じていて、広く参加を募るイベントを通じて、こういう研究所、こういう研究もあるんだなっていうのを院生に知ってもらえるのではと思います。

【江成】そうですね。定期的な研究報告会でもいいかもしれないし、さらにインセンティブをつけるなら、例えば懸賞論文みたいなものを国際シンポジウムのテーマに沿った形で実施するような企画もありかなと思いますね。やはり年に一人ぐらいのペースで若手研究者が定期的に入ってくる環境が望ましいのかなとは思っています。それをどう作っていくかという点は、地情研の運営を考える中でも大きなテーマなのではないでしょうか。

僕は、僕や堀池さんのように地情研の中で揉まれていくことで、学振に採用されて、きちんと博士論文出せました、それから就職も決まりましたといったロールモデルを増やしていくことが地情研にとっても非常に重要だと考えています。そういったところを意識して、地情研の活動にプラスになるような人が増えていってほしいなと思いますね。

【堀池】そうですね。地情研に貢献できるよう、さらに研究を進めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

【江成】ありがとうございました。

